

プロジェクト名：母子家庭の子どもと、別れた父親との関係

——学童期から思春期の発達をめぐって——

プロジェクト代表者：堀田香織（埼玉大学教育学部・教授）

1 研究の目的

現在、我が国では離婚件数の増加とともに、母子家庭が増えつつある。母子家庭の子どもたちは、親の離婚までの家庭内の葛藤や、離婚後の経済的苦境、時には離婚後の母親の精神不調などによって、様々な問題を起こしやすくなる。しかし、実家や友人、地域、学校などから母子家庭へのサポートが得られることによって、そうした問題は最小限に食い止められると考えられる。特に今日、子どもと別れて暮らす父親が子どもの養育を積極的にサポートすることの重要性が指摘されている。もちろんそれは子どもにとって、その発達段階に応じた適切なサポートでなければならない。離婚先進国ともよばれる欧米を中心にして、両親の離婚後、父親の適切なサポートの有無により、子どもの心理的発達に差が生じることが調査されている。本研究ではこうした問題について、ナラティブ・アプローチを用いて接近を試みた。これは、親の離婚という事態は同じでも、それをどのように自分の人生と関連付け、組織立て、筋立てるかによって、人生全体の意味は肯定的なものにも、否定的なものにも変わりうるという側面に着目し、子どもが親の離婚と自分の人生、そして別れた父親と自分をどのように「語るか」を分析するものである。今回は特に、親の離婚を自分の人生に肯定的に位置づけることに成功している青年の「語り」を取り上げ、彼らが別れた父親との関係をどのように自分の人生に位置づけてきたかを考察する。

2 研究の進め方

研究方法：まず、年齢、性別、母子家庭になった理由・時期、学歴など、できるだけ多様な18才以上の青年17名を探し出し、①親の離婚が自分に人生に与えた影響、②離婚後の父親との関わり、③別れて暮らす父親への思い等について、半構造化面接調査により聴き取りを行った。本研究では、これらの協力者の内、幼児期から中学時代という、子どもの記憶に残り、かつ人格形成上重要な時代に親の離婚を経験し、母子家庭で育った青年13名を抽出し、さらに、その13名の中で、親の離婚を自分の人生に肯定的に位置づけ、別れて暮らす父親との関係についても語ってくれた6名の協力者の逐語録を最終的な分析対象とすることとした。

分析：逐語録を物語の最小単位としての「ストーリー」に分割し、次に、幾つかの「ストーリー」のまとまりである「筋立て」を構成し、語り全体をマッピングした。「筋立て」とは、ある出来事が起こり、時間的経過を伴って結末にいたるまで構成して語られた物語の筋道のことである。次に①離婚の原因はどのように語られか？②両親の不和はどのように体験されたと語られるか？③離婚前の生活やそこでの父親は、どのように語られるか？④離婚の結果はどのように評価されるか？⑤離婚後の思春期・青年期までの父親の関わりはどのように語られるか？という5つのリサーチクエスチョンを立て分析した。最後に、離婚の原因、父親像、自分自身について、学童期・思春期を通して書き換えられた物語を検討した。

3 研究の成果

協力者たちが、傷つきの多かった体験をどのように人生に肯定的に位置づけているのか、そこで父親との関わりはどのように語られるか、そのような物語の構造の特徴を考察した。

離婚の原因としての父親：必ずしも離婚の原因が明確に語られているわけではないが、原因の一つではあったらと推察される＜父親の否定的側面＞が数多く語られている。父親の不在・浮気・ギャンブル・怒り・暴力などである。父親の怒りや暴力などを目の当たりにしていた子どもたちは恐怖を感じ、それを父親の非として感じた一方、父親の浮気、ギャンブルなどは、母親や身近な大人に聞かされた父親の非が、まだ母子不分離な発達段階で、子どもたちの人生の物語として取り入れられていたと考えられる。母親がどのように父親を評し、離婚の原因をどのように語るかは、子どものその後の父親物語生成に影響しているのである。

父親の思い出：両親の離婚の原因に関しては、非のある存在として語られることの多かった父親であるが、しかし離婚前の父親との思い出について聞くと、父親と過ごした良い思い出が語られ、肯定的な語りも見られた。つまり、子どもたちは両親の不和に傷つき、父親への恐怖を語りながら、一方で、こうした父親への肯定的な思いを抱いていることが分かる。父親と母親と子どもという3者関係の中で、否定的な父親像を抱きながらも、自分と父親との2者関係においては、肯定的な父親像をも抱くという矛盾した物語構造がここに生まれている。この肯定的なニュアンスを残す父親を求め、父親がどんな風に自分を受け入れてくれるのかを確認していく物語が別居後、始まることになる。

離婚の意味づけの語り：彼らは両親の離婚を家庭の崩壊と意味づけるのではなく、肯定的に意味づけていた。例えば、母親が父親から解放され明るくなったというような「母親の救済」、あるいは、両親の不和が消失し安心したというような「自分の救済」である。このように離婚に肯定的な意味づけがなされることが親の離婚を自分の人生に肯定的に位置づけることに成功するための重要な点であろう。

離婚後の父親との物語：重要な点の第1は父親が別れてもなお、自分を受けて入れてくれるという点である。第2に、父親との面会を継続するか否かが子どもの自己選択にゆだねられることである。離婚後父親と定期的に面会していた子どもたちは、小学校卒業あるいは、中学校卒業などを機に、「自分が忙しくなった」などという自分の側の理由で、会わなくなっており、葛藤を生じていない。もし会いたくなれば、また会えるという確信を持ち続けていられるのである。また、事情があつて父親と会わずに過ごしている子どもでさえ、「会おうと思えば会える」、あるいは、「もう会わなくても構わない」というという「語り」を生成している。父親との離別が親の事情によるもので、当時子どもであった自分は受動的にそれに従うしかなかったし、またその後の親との関わりの中でも、父親に会うことができないという状況を強いられていても、あたかも、自分にその選択権があり、父親との関わりを継続するか否かを決定できるという「自己選択」の語りを生成できることは親の離婚を肯定的に自分の人生に位置づける物語のひとつの条件であるだろう。

物語の書き換え：人生の物語は一度成立するとそのまま変わらないものではない。子どもが成長するに従って、新たな意味づけがなされ、絶えず変化していくものである。本研究の協力者たちは、父母自分の三者関係の中では、母を苦しめ、離婚の原因となるような否定的な父親像を持ち、同時に父親と自分の二者関係では良い思い出を持つ肯定的な父親像を有していたが、しかしその後、思春期になり母親との心理的分離を遂げ、思春期を過ぎ成人にいたり、父親との良い関わりが持てると、それまで母親から聞かされてきた否定的な父親像の物語が、書き換えられていく。同時に、父親の非を離婚原因とした語った物語を、夫婦の関係性をとらえた語りに書き直されているのである。